

【表現学関連分野の研究動向】

日本語文法(現代)

志波 彩子

日本語学と日本語教育の乖離が著しくなった昨今の現状に対し、近年、日本語教育のための教育文法が叫ばれつつあり、『日本語文法』23-1では「日本語教育」の特集が組まれた。コーパスを用いた日本語教育文法の研究も盛んだが(中俣尚己(編)『話題別コーパスが拓く日本語教育と日本語学』ひつじ書房など)、数値を出すこと自体が目的になってしまっている研究が散見される。数値はあくまで「事実」であり、これが何を意味するかという「説明」のための材料・手段であるべきだと思う。

一方、現代語の文法記述の流行は、文の骨格としての文法現象から外れるために、従来記述が進んでいなかった副用語や副詞的表現の研究に移りつつある。2023年も多くの副詞研究に加え、とりたて(副助詞、係助詞)、接続表現等の研究が見られた(『日本語の研究』『日本語文法』『日本語/日本語教育研究』参照)。その中で、井戸美里『現代日本語における否定的評価を表すとりたて詞の研究』(くろしお出版)は、とりたて詞が持つ多義をめぐって、それぞれの意味の現れと文法的な性質(統語的特性)との関係性、また意味間の関係性を丁寧に論じたものとして目を引く。井戸がとりあげている文法形式や語彙が持つ「評価性」は、今後も文法研究において議論の中心となる課題だろう。

宮腰幸一「アスペクト依存ヴォイス関数と経験主指向性」『日本語文法』23-1は、テシマウが表す「動作の完遂」や「不本意」、「反予測(非意図)」、「思い切って行う」などの、一見矛盾する意味記述をめぐって、「意図」を「行為者が行為開始前に(無意識に)生み出す結果の予測」と定義して、統一的な説明を試みる。この中で宮腰は、日本語文法は経験主指向性が強いとし、テシマウ、使役や受動、授受表現などはすべてこの経験主指向性と関わっていると述べる。これは、筆者(志波)の見方からすれば、日本語が話し手の側から事態を述べることを好む言語に変化してきたことによる結果であり、「動作主指向」の西欧語に対し、日本語は「話し手指向」だとする方が本質的だと思われるが、今後の議論の展開に注目していきたい。

ジャンル・文体と文法との関係として、拙稿「ジャンル・テキストとその要素としての構文—受身構文を例に」『日本語文法』23-2では、ある意味的なまとまりとしてのテキスト全体を、その部分(要素)として構文が構成しているという見方から、テキストと構文とのダイナミックな相互作用について論じた。テキスト(談話)における構文の機能については、ニームチャラン・ニーラチャー「存在文における名詞句の指示性と主題導入機能」『日本語文法』23-1、認知言語学からは、山梨正明『小説の描写と技巧—言葉への認知的アプローチ』(ひつじ書房)があった。

最後になるが、近年の動向に引き続き対照研究も深まりを見せ、陳冬妹『話し言葉における受身表現の日中対照研究』(ひつじ書房)では、中国語の被構文と日本語の受身構文について、詳細な対照がなされている。(名古屋大学)